

論文審査の結果の要旨

報告番号	博（水・環）甲第21号	氏名	楊 燕
学位審査委員		主査	早瀬 隆司
		副査	連 清吉
		副査	深見 聡
		副査	片山 健介
論文審査の結果の要旨			
<p>楊燕は、2011年3月に長崎大学環境科学部を卒業した後、同年4月から大学院水産・環境科学総合研究科博士前期課程で環境共生政策学を専攻し、2013年3月に修了した。さらに同年4月長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科博士後期課程に入学し、現在に至っている。日本と中国との間での交流の在り方に関心を持ちながら、大学院入学後はジオパーク及びジオツーリズムを中心とした政策についての調査研究に従事し、その成果を主論文「ジオパークとジオツーリズムに関する実践的研究―日中の事例を比較して―」として完成させ、公表された2編の審査付き論文と公表予定の1編の審査付き論文を付して、博士（環境科学）の学位の申請をした。水産・環境科学総合研究科教授会は資格審査を経て、本論文を受理し、上記の審査委員からなる審査委員会を設置した。委員は主査を中心に論文内容について慎重に審議し、平成29年1月25日に最終試験及び公開論文発表会を実施した。</p> <p>論文は、防災や地理・地学教育に関わる自然として関心の高まる「ジオパーク」の存在に注目し、ジオツーリズムとの関係から、そのより適切で効果的な活用の在り方を探ろうとしたものである。特に、世界で最多の認定ジオパークを誇り地域振興にも成果を上げている中国の事例と島原半島のジオパークの事例とを取り上げて比較検討することにより、ジオパークの活用手段の中核であるジオツーリズムの在り方について考察し、理論化を試みた。その結果、ジオパークが保護と地域振興あるいは活用の両立という複合的な役割を持っており、地域住民の役割が重要であることを明確にし、そのためジオツーリズムでは地形・地質を基盤にして形成された自然環境と自然環境の基盤を背景にして形成された歴史・文化的な人間環境のつながりを、過去から未来につながるわかりやすいストーリーにして地域で共有する必要があることを指摘した点は意義深い。日本のジオパークの将来は魅力あるストーリー性の構築と防災・環境面での教育側面の重視による保護と活用の両立にあるという指摘である。委員からは、ストーリーの具体化に</p>			

関することについて、地質遺産、大地の遺産、ジオヘリテージ等の用語の使い分けについて、アンケート調査と結論との関係について等論文内容についての質問がなされたが、申請者から適切に回答があった。本研究は今後の我が国のジオパークについてその将来像を展望する際に貴重な知見を提供したものと評価することができる。

学位審査委員会は、環境科学の領域において有効な成果であると評価し、博士（環境科学）の学位に値するものとして合格と判定した。